

俳句雑誌



空

令和3年11月25日発行

第19巻5号

通巻第99号



2021・11

**SORA** 99号

千葉 原 友 子

睡蓮に平らな水のゆきわたる  
 睡蓮のどこも濡らさず咲きにけり  
 噴煙にけふの梅雨空のしかかる  
 川岸に密生の竹梅雨長し  
 蒔きものに畑明け渡す半夏生

大野城 森 田 明 成

産土を揺らしてゐたる牛蛙  
 列島に体温超えの暑さかな  
 夏草をまき込むやうに列車過ぐ  
 板の間に素足投げ出す生家かな  
 風入や靴に錆びたる滑り止め

福岡 栗 原 京 子

天上は仏だらけか蜘蛛の糸  
 青芝に伏して勝者の頬ずりす  
 返答に窮する問やオキザリス  
 島ぢゆうの教会めぐる遅日かな  
 餌を欲る猫が網戸へ飛びつけり

熊本 松 田 明 子

氏子らの植樹のあとの山開き  
 土均らし神棚据ゑて山開き  
 斎竹の撓りどほしや山開き  
 麦秋や埋もれてしまふ一里塚  
 剥製の多き宿なり夏炉焚く

兵庫 林 徹 也

丈あらは松より垂るる蛇の衣  
 地下街の出口を塞ぐ大夕立  
 盆花の大方妣の庭に剪る  
 席ひとつ空く晩学の休暇明け  
 待宵や箆筒ひとつの妣の部屋

粕屋 吉 田 菫

葉桜をぬけて仕事の顔となる  
 通ひ禰宜みなで迎ふる新樹かな  
 形代に家族の数の息かくる  
 盛り上がる堆肥を割つて兜虫  
 手と足の勝手にうごく盆踊

太宰府 西 住 三 恵 子

もう弾かぬピアノの上のシクラメン  
 門徒衆のほどよき集ひ藤の花  
 白服をゆるやかに着て旅二日  
 独り居に蚊の鳴きたつる夕べかな  
 川釣りに手づくりの浮き夏来たる

須 恵 苑 実 耶

収穫の寸前の田を猪荒らす  
 日脚伸ぶ脇の小屋より山羊の声  
 身辺をうろついてゐる風邪の神  
 寒紅は戦ひの色出社せり  
 埋火や恋の顛末話し出す

東京 山田 正子

切岸の人寄せ付けぬ百合の白  
人は皆誰かの遺族鳳仙花  
今映画観てみてふつと炎天を  
太宰忌やきのうの雨に藻の流れ  
湯の町の朧の坂に下駄の音

福岡 三井所美智子

隣田の色濃かりけり植田寒  
絡み蔓くぐり脱ぎゆく蛇の衣  
黒揚羽好きの高さのあるやうな  
暁けの雲薄く広がるアガパンサス  
魂のごと斑猫の失せにけり

直方 曾根 富久恵

学校のチャイム聞こゆる風炉点前  
衣紋竹けふのほてりを静めをり  
ジャム瓶に移し目高を呉れにけり  
蝮酒心しづめて封を切る  
夏夕べ夫の背に塗る痒み止め

大阪 井上 和子

緑さす国旗に深き畳敷  
飽食の日を麩の舌触り  
茹で汁の濁りを晒す青葉冷え  
ふと動く猫の眼妖し草いきれ  
新しきリユツク枕に登山小屋

福岡 あさなが捷

蝌蚪の群うねりて黒き帯となる  
皇后の慎重な歩や夏きざす  
出番まで舞台見てゐる村芝居  
着くづして肌になじみし浴衣かな  
なりひらの手を離したる昼寢覚

直方 石橋 幾代

笑ふ顔隠してゐたる団扇かな  
死後のこと記し涼しくなりにけり  
宝物のやうに見てゐる金魚玉  
裸子の顔を真つ赤に泣き止みぬ  
忘れものしてゐるやうな昼寢覚

北九州 田中とし江

朝曇島は石油の備蓄基地  
蝉声の大樹に遠し坊の跡  
帰省の子いつまでも犬撫でてをり  
鰻搔並ぶ大河やとの曇り  
踏み出る竪穴住居日の盛

神奈川 窪 みち子

キャンプ村巨き北斗の見下ろしぬ  
キャンプファイア囲む子の背に大き影  
わが影の巨きに怯えキャンプの子  
山の風すらり抜けゆく汗のシャツ  
投げよこす汗まみれなる運動着

長崎 松尾龍之介

夏帯や男は持たぬおくれ髪  
雨気招く定家葛の花の数  
白服もセピア色なるアルバムよ  
ハンモック宇宙旅行も産業に  
夏果ての靴よりこぼす島の砂

東京 今井康子

杉玉に残る緑や走り梅雨  
半夏生黄味が崩るる目玉焼  
ひとり頼めば蜜豆をみな頼む  
冷や汗か寝汗か夢を忘れたる  
願ふときいつも無力や夏落葉

兵庫 大西乃子

香水の一滴彼を虜にす  
汗かきてはがき一枚ポストまで  
風死せり緋色の花のまつさかり  
仁王像歯をくひしぼる大暑かな  
あかがねの空にかはほり乱れとぶ

北海道 押田裕見子

この部屋に蠅は入れぬぞ一撃ぞ  
返信は待たず恐れずレーズ編む  
てんと虫我は無力な巨人なり  
踝のきりつと締まる藍浴衣  
白壁に蛾は美しく留まれり

太宰府 山本則男

一僧のまくなぎ払ふこともなし  
悼歌のくぐりゆくなり合歡の花  
子蟪蛄堅気の貌で生まれ来し  
滴りの刹那はひかり持ちにけり  
誘ひたる色のおふるる夜店かな

北九州 兒玉充代

軒寄せしんだら町の大暑かな  
夕涼のそぞろ歩きや無一物  
すべて為し終へたるごとく夕焼消ゆ  
登山靴の音に馴れたる山の禽  
鶺鴒の声まろび水辺をかがやかす

福岡 秋津令

点滴の痣またふえて日雷  
配られし団扇の揃ふ盆踊  
鉢巻に汗のしみ込む庭師かな  
打水や経木に書かれし御品書き  
引き波に転がる石や晩夏光

粕屋 秋千晴

落雷を撥ね返し阿蘇噴火せり  
花火の絵箱にあまたの花火買ふ  
馬追を見る手囲ひの間隙より  
青々と阿蘇の暮れゆく菊脛  
湯上がりの肌をさませり虫の声

## 空集作品評

柴田佐知子

に景が鮮明に現れてくる。情景を詳しく述べているのだが、使われた動詞は〈そよぐ〉のみだ。〈そよぐ一葉を羽交締め〉：動かしようがない表現である。

隧道に入ればすぐ出るほととぎす 吉田 葎

大根を引き抜くや穴息洩らす 中田みなみ

〈隧道〉は「スイドウ」あるいは「ズイドウ」と読む。トンネルの漢語的表現である。「○○隧道」と記されている抜け道のような短いトンネルでは横書きの文字は右から始まっていることが多かった。〈入ればすぐ出る〉という表現が面白い。この言葉の先に〈ほととぎす〉が置かれたことで句が生きたきとしてくる。短い翳りを抜けると(ほととぎす)の声が響く新緑の光が溢れているのだろう。

空蟬がそよぐ一葉を羽交締め 曾根富久恵

これしきの水溜りにも水馬 戸栗 末廣  
一茶を思わせる句である。女性であれば「あらまあ」と声にするほどの小さな驚きであろう。その軽やかさが〈これしきの〉という口語的表現で楽しく作品化されている。

空蟬はブロッケン堀、鉢植えの蘭の葉などいろいろな場所で見かける。そのまま述べただけでは単なる場所の説明である。掲句は難しい言葉や無理な表現は一切ない。言葉の選択と配置が的確で、読んだ途端

ドア止めに西瓜転がす勝手口 山田 正子  
日常の寸景を見逃さず真つ直ぐに詠まれ、西瓜の存在感がクローズアップされている面白い作品。

## 空集

柴田佐知子選



隧道に入ればすぐ出るほととぎす 葎 吉田 葎

師の筆の夜の字歪む扇子置く 東京 中田みなみ

廃線は幅を保てり夏の蝶

紙を漉く動きそのまま礼なせる

姫女苑貧窮一途の寺を守る

北窓を塞ぎし隅に古ギター

巻きつきし枝ごと蛇の撓ひたる

大根を引き抜くや穴息洩らす

キャンプファイヤ蛇口の水が迸る

伏兵のごとく現れ野火放つ 福岡 角野 良生

足くびに草のふれたる野外劇

去り際の含み笑ひや春日傘

空の色広ぐる川や吹流し 直方 曾根富久恵

おたまじゃくしおたまじゃくしにもぐり込む

水音にこゑの消さるる蛍狩

往生が残る霽れごと茄子の花

白南風や祠は神の島へ向き

何一つ置かぬ賛沢夏座敷